

Spine Dynamics 学術シンポジウム 2019 ルポ

集まれ全国のセラピストの仲間たち

新しい治療概念でパラダイムシフトを

相互啓発でさらに理解をふかめよう



5回目となる Spine Dynamics 療法学術シンポジウムが今年も開催されました。年々、発表内容の精度が高くなっていると同時に、Spine Dynamics 療法はこれから発展する・発展すべきであると実感致しました。

Spine Dynamics 療法は、故脇元幸一が亡くなる直前まで臨床家であったように、臨床第一の学問です。人が悪くなることにも理由があり、人が良くなるにも理由がある。その理由を明確にしつつ、結果のだせる理学療法の展開が必要となります。今年は真剣と笑いが入り交じった会であったと思います。発表された Spine Dynamics 療法の可能性をいくつかご紹介させていただきます。



【研究発表：WBI・筋緊張】8題

主題発表として、のぎきクリニックの大山先生に WBI の経時的変化について発表頂きました。WBI は作用力エネルギーを評価する指標であり、その指標の有用性を示すとともに、作用力とパフォーマンスにはギャップが生じているとの結果でした。パフォーマンスはスキルを含みます。ですが、パフォーマンス=スキルは、重力場においての物体が動くルールの上に成立するものであり、聴講された方々は運動療法ならびにトレーニングの重要性を改めて実感して頂けたと思います。



【研究発表：胸郭、柔軟性、脊柱】8題

骨の変形や半月板損傷という組織変性に対し、その背景の違いについてご報告頂きました。そこには運動習慣の有無が関与し、運動習慣の違いが身体へ及ぼす影響について示唆されています。運動が大切であるということは誰もが思っていることですが、同時に誰もが実践できていないのがほとんどではないでしょうか。行動変容への促しと理由付けを提示して頂きました。

【経験発表：介入】7題

超高齢化社会を向かえるなかで、介護は非常に大きな問題となっています。介護分野における Spine Dynamics 療法を、福岡済生会大牟田病院の栗本先生から主題発表して頂きました。サルコペニアの診断は筋肉量によってなされますが、筋肉が何のために存在するのかと考えると姿勢を保持して動く為であり、実際にどの程度使うことが出来るのか=WBI はどの程度かを評価することの有用性を報告して頂きました。



「麻痺がある」「動かすと痛い」という主訴に対し、どうしても患部に着目しがちです。しかし、患部という駆動源は固定源のうえに成立するため、もともとの土台である固定源の問題があれば駆動源は成立しないという考えから、固定源アプローチが脳血管障害で症状が慢性化した症例に対する即時的な効果が報告させました。さらに即時的な効果が持続的効果となるようセルフケアの指導を併用する必要性を提示されていました。自己医療につなげることが第一のルールに対する真の改善であり、Spine Dynamics 療法の根幹であると思います。

【研究発表：運動療法】7題

このセッションでは運動療法を中心に発表がなされました。Spine Dynamics 療法は方法論ではなく目的論です。つまり、手法は何でも良く、何を目的として実施するかが重要であると説明しています。施設に既存するものや市販の物品などを使って、目的を達成する方法を考えるとといった知見の積み重ねは、参加された方々にとって非常に為になることだと思います。その中で、D-ボールなるものが発売予定であり、近々D-ボール入門編が開催されるとかされないとか、、（笑）

【経験発表：運動療法】5題

Spine Dynamics 療法の可能性を大きく示された発表が行なわれました。いずれも、Spine Dynamics 療法が目指す改善・未病・予防にむけた取り組みであり、保険診療に留まらず様々な場面で用いることができることを示して頂きました。



～シンポジウム 2019 を終えて～

Spine Dynamics 療法はこれから進化していかなければなりません。整形疾患のみならず、中枢疾患も呼吸器疾患も、介護対象者もスポーツ障害も、一般アスリートもトップアスリートも、健常者も予防も、地球という重力場において物体が動くという原理原則の考え方が適応されるということを情報発信することが必要になります。わかったと出来るが異なるように、インプットとアウトプットは別物です。Spine Dynamics 療法がこれから進化するには、原理原則の考え方を理解しそれを実践し、それをアウトプットすることが求められます。そして、その役割は今回参加された皆様、そしてこれから参加される方々によってなされると信じています。

オリンピックイヤーの来年は地方開催であり、初の複数開催を予定しています。多くの皆様にお会いできること、そしてたくさんアウトプットが成されることを楽しみにしています。

では、また来年お会いしましょう！

文責：嵩下敏文（株式会社 創生）